エ ピ ロ ー グ

#エ ピ ロ ー グ

尾 声

#

#だからといって、今回のがんばったわたしへのご褒ほう美びは、あまりにも糖分過多なのではないでしょうか……。

#わたしは鏡の前、化粧水代わりに接着剤を塗りたくったようなこわばった顔面で、カチコチに緊張していた、

#球技大会が終わり、地獄の筋肉痛と、そしてぶり返しの体調不良をなんとかやり過ごし、翌々日の学校、放課後。

#お外は天気がよくて、今年最後の陽気と言われる秋晴れ。

#女子トイレを出て、わたしは向かう。

#『明日の放課後、屋上で待っているね』

#昨夜そんなメッセージをもらって、わたしはＯＫのスタンプ以外に返信の仕方がわからなくて、それからずっと緊張し続けている。

#心臓も爆音を奏かなでているし、この調子で紫陽花あじさいさんとご対面したら、わたし死ぬんじゃないだろうか。

#ご褒美というのは、言わずもがな。

#紫陽花さんからの、キスだ。

#「ううう……」

#わたしは、胸を押さえる。

#正直な話、まだ、こんなわたしでいいんだろうか、という葛かつ藤とうはある。というか永遠にある。きっと二万年経たって人類が外宇宙に進出を果たしても、わたしは思い悩んでいるだろう。

#だけどもう、決めたことだ。

#がんばったご褒美のキス。最初のダンジョンでエクスカリバーが手に入っても首を傾かしげるけど、ラストダンジョンに落ちている聖剣はついにここまで来たかという達成感がある。これは、そういうものなんだ。

#いや……それでも、やっている最中は苦しかった気がするけど、終わってみると、果たして練習も試合も、紫陽花さんからキスをしてもらうほどのことだったかな……？　ＮＢＡ選抜チームを倒すぐらいのことしないと、キスしてもらっちゃだめなんじゃないか……？

#だめだ！　怖おじ気けづいてきた！

#真ま唯いのときも、紗さ月つきさんのときも、突然だったから！　覚悟決めるために時間をたっぷりもらったら、わたしは覚悟なんて決まんないんだよ！

#屋上に続く階段を見上げて、わたしはぐっと拳を握る。

#よし、逃げよう。

#逃避という前向きな光を瞳に宿し、わたしは回れ右をした。念のために、階段から足を踏み外して、言い訳代わりに骨の一本でも折っておいたほうがいいかな。

#わたしがゴミクズみたいな考えに取りつかれていたところで、声がかけられた。

#「――甘あま織おりさん。少し、お時間いいかしら」

#「……え？」

#高たか田ださんと、その後ろに三人の女の子がいた。

#…………骨の一本で済むかな？

#

#校舎裏に連行されたわたしは、必死に後ずさりするも、後ろは壁。

#「あ、あれですか……!?　負けた腹いせに……！　ひとりひとり、ブチ転がしていこうって、そういうやつですか……!?　わたし、最初のターゲットですか!?」

#まさか、直前で紫陽花さんから逃げようなんて足を止めたから、罰が当たったのか……？

#違うんです、ただの気の迷いだったんです神様！　あなたの天使にわたしが逆らうわけないじゃないですかぁ！　この仕打ちはやりすぎですよお！

#わたしが泣き叫びながら命乞いをしようとしたタイミングで。

#おもむろに、高田さんが頭を下げてきた。

#「申し訳ありませんわ！」

#「…………な、なんですか……？」

#謝る相手はわたしじゃなくて、紫陽花さんだし、それを言うなら高田さんたちはすでに紫陽花さんに謝ってくれている。四人で迷惑をかけたと、紫陽花さんにしっかりと謝罪してくれた。だから、もうこれ以上話すことはなにもないはずなんだけど……。

#「あなたにしたことを、みんなから聞きましたわ」

#「……わたしに、したこと？」

#どうやら、本当にわたしはブン殴られずに済む？　大丈夫？

#すると、後ろにいた羽は賀がさんが、自分の書いた始末書を読み上げるように言う。

#「甘織さんに……わざと負けて、って、お願いしたこと……」

#「あ、ああ」

#「ほんっとーに！」

#高田さんが声を荒らげると、後ろの三人がびくっと体を震わせた。

#「最悪ですわ！　終わってから聞かされて、血が沸騰しそうになりましたわ！　そこまでして勝って、私が喜ぶとでも思っていたんでしょうかね！　まったく、心から遺い憾かんですわ！」

#「ご、ごめんなさい、甘織さん……。本当に、ごめんなさい……」

#亀かめ崎さきさんが、涙ぐんでいる。

#シメられるわけじゃなさそうだ。よかった…………。

#とりあえずほっと胸を撫で下ろし、状況を再確認する。

#高田さんが三人を連れて、球技大会の一件を、わたしに謝りに来たのか。なるほど。

#まあ、あれは確かに、かなりメンタルに来るお願いだったけど……。

#「ええとね、高田さん。わたしはもう気にしてないから……。あんまり三人のこと、怒らないであげてほしいな……」

#すると高田さんは意外そうに眉をつり上げた。

#「……なんですって？」

#「だって、三人はＢ組を……っていうか、高田さんを勝たせるために、がんばってたんだから。それは、がんばり方が間違っていたのかもしれないけど……でも、高田さんのためだったわけだし」

#三人が驚いて、一斉にわたしを見る。

#高田さんは眉み間けんにシワを寄せていた。

#「ですから、それが私のためになると思われていたことが、甚はなはだ不本意なのであって……」

#「それは、そうかもだけど」

#「とはいえ！」

#火炎放射器のように大きくため息をつく高田さん。

#「迷惑をかけた当事者であるあなたにそう言われてしまっては、こちらも立つ瀬がありませんわ……。みなさん」

#高田さんは振り返らず、うつむいたまま。三人に告げる。

#「もう二度とこのようなことはしないでくださいまし。……私のことを、本当に思ってくださるのなら」

#お友達たちは、それぞれしょげながらも、返事をした。

#自分が善意で行動したことを、相手がどう思うかはわからない。そういう経験はわたしにだってある。

#紫陽花さんと家出旅行に行ったとき、わたしは善意でお金を払うべきだと思ったし、紫陽花さんは善意で自分がぜんぶ払うべきだと思っていた。価値観の対立したわたしたちは、いろいろあっても、なんとかこじれずに済んだけど……。

#結局は、お互いに話し合うしかないんだよね。なにがお互いのためになるのか。それをされた人が、どういう気持ちになるのか。ま、それで人に迷惑をかけちゃうのは、だめだけどさ！　今回の三人みたいに！

#っていうかわたし今、紫陽花さんを待たせているんだった！

#「用事が済んだのだったら、わたしはこれで」

#「そういえば、あなたには話していませんでしたね……。私が、なぜあんなにも王おう塚づか真唯に固こ執しつするのかを」

#「え？」

#いや、知っているけど……って言おうとして、そういえば羽賀さんに聞かされたあれは、他言無用との約束だった。

#わたしはもにょもにょする。

#「う、うん……」

#「今回、いろいろと迷惑をかけてしまいましたからね。いいですわ、恥を忍んであなたにだけはお伝えします。あれは、私が小学五年生の頃……」

#遠い目をして、胸に手を当てた高田さんが語りだす。

#ま、まあちょっとぐらいなら……。この後、すぐに屋上に向かえばいいんだ……うん……。

#しかし高田さんのワンマンライブは、ぜんぜんちょっとじゃ済まなかった。

#

#「そこで私の全身に稲妻が走ったのです……。ああ、なんて美しい、と。こんなにも、ヴィーナスに愛されたような人間がこの世界にいたのか、と」

#「完全敗北でしたわ。私の心が、もはや屈服してしまったのです。しかし、そうなれば私に生きる道はふたつにひとつ。受け入れるか、そうでなければ拒絶するしかありません。私は自己を守るために、王塚真唯を否定しました」

#「しかし、まさかの再会でした。芦あしケが谷や高校に、あの女がいるとは。王塚真唯はもはや私の中で、認めることのできない存在として膨ふくれ上がっていて……今や、敵対する以外の道はありませんでした。だからこそ私はＢ組の女王として君臨することを選んだのです」

#「長い……たかが齢よわい十六の娘ではありますが、本当に長い呪いでしたわ……。でも敗北を認めることができて、ようやく私は前に進めるかもしれません」

#

#長いのは、高田さんの話だよ………………！

#と、思いっきり叫びたかったけど、高田さん自身は自分の人生においてめちゃめちゃ大事な話をしているっぽいので、水を差すわけにもいかず……！

#これが陽キャであるということ。そしてこれが、誰かの人生に巻き込まれるということなのか……。なるほどね、陽キャも楽じゃないわ！

#話しているうちに勝手に浄化された高田さんが、澄んだ笑顔で手を差し出してくる。

#「それもこれも、あなたのおかげですわね。甘織さん、あなたは本当にお人ひと好よしで、変わった人ですのね。けれど、ありがとうございます。あなたと出会えてよかったですわ」

#「ど、どういたしまして！」

#わたしは素早く高田さんの手を握る。ちゃんと女の子の手だった。

#この人も、王塚真唯に人生を狂わされたんだな……。

#そう思うと、同情する気持ちも湧いてくる。紗さ月つきさん、花はな取とりさんに続く、三人目の被害者だったか……。あれ、そしたらわたしもそうか？　いや、深く考えるのはやめよう。紫陽花さんが待っているんだ。

#「じゃ、じゃあわたしはこのへんで」

#「ただし、幼い頃に見た夢を、もう一度繰り返すことはできません。華やかな仕事に憧あこがれていた少女は、もういないのです。しかし、こんな私にも大切にしてくれる友がいる。それを気づかせてくれたのが、あの王塚真唯とは皮肉ですけれど、ふふ」

#……あれ!?

#「鈴すず蘭らんさん、あなたには今まで、ずいぶんと迷惑をかけてきましたわね。でも、あなたの素そ朴ぼくな優しさに、私は本当はずっと救われていたんですのよ」

#「ひ、ひみちゃん……。ひみちゃんに、そんなこと言ってもらえるなんて」

#なんか、高田卑ひ弥み呼こ物語のシーズン２始まってないか!?

#「思えば、あなたとの出会いも――」

#っていうかこれ、わたしの目の前でやる必要あります!?

#ほんとに用事あるんですよ！　甘織れな子銀行にこれ以上、女の激重感情を貯蓄しようとするな！　うちはそういうの取り扱わないんです！

#わたしは手を突き出す。

#「待ってください、あの、いったんちょっと待ってください！　今、代わりの子を呼びますので！　続きはその子の前で話してあげてください！」

#必死に告げて、わたしは電話をかける。

#お願い、どうかまだ校内にいてくれ……！

#こういうとき、わたしの人生は基本的に思い通りにはいかないものだけど、きょうは違った。なんたって、待ち合わせ相手は、紫陽花さんだ。

#わたしの行動には、紫陽花さんの祝福がついている！　だから――。

#『はいもしもーし、れなちんー？』

#「香か穂ほちゃんお願い！　わたしを助けて！」

#『え、ええ～……？』

#

#こうしてわたしは（香穂ちゃんを身代わりに差し出すことによって）高田さんたちの包囲を突破した。香穂ちゃんには恨まれるだろう。だけど仕方ないから！　あとでいくらでも謝りますから！　きょうが終わったら、いくらでも！

#ダッシュで屋上への階段を駆け上る。

#もう、このまま逃げ出そうなんて気持ちはなくなっていた。ごめんなさい、あれは本当にただの気の迷いだったんです！　だからもう天罰はよしてください神様――。

#もしこれで紫陽花さんがものすごく時間に厳しい人だったら、『私、一分一秒を大切にできない人とは、一分一秒も一緒にいたくないから……』と吐き捨てて、家に帰ってしまったかもしれない。そして縁を切られるかもしれない……。

#お願いします、紫陽花さん！　まだ学校にいてください！

#わたしは泣きそうな気持ちで屋上のドアに手をかけて、そして。

#ばーんと開け放った。

#紫陽花さんは!?

#いらっしゃった！

#わたしの視線の先、屋上の手すりの前に立って、髪を風に揺られている。

#「あ、れなちゃん」

#わたしに小さく手を振るその笑顔には一ミリの陰りもなくて、ただひたすらにかわいらしさだけがあふれていた。

#「紫陽花さん！」

#その姿を見て、なぜかわたしは妙に感動してしまう。

#よろよろと屋上に出たわたしの影が長く伸びる。

#夕焼けに照らし出された紫陽花さんは、かわいいだけじゃない。

#すっごく、きれいに見えた。

#「ごめん、遅れて！」

#「ううん、ぜんぜんだよ」

#紫陽花さんは、本当になんでもないことのように、微笑んでいた。

#「チビたちと生活しているとね、ちょっと待たされるのなんて平気になっちゃうんだよね。逆に、遅れても連絡してくれたり、待ち合わせ場所には来てもらえるから、安心っていうか」

#「ううすみません、もう二度と紫陽花さんに寂さびしい思いをさせないようにがんばりたいと思っています……」

#「寂しくなかったよ」

#自分の胸に手を当てて、紫陽花さんは笑みをこぼす。

#「れなちゃんのこと、考えてたから」

#「紫陽花さん……」

#わたしは、紫陽花さんの前で立ち止まる。

#ふたりは、手を伸ばせば届く距離。

#ふふっと紫陽花さんが笑う。

#「ほんとはね、教室で待っていてもらおうかなーって思ったんだけど。でも、他の人に見られちゃうかもしれないから、屋上にしたの」

#「そ、そうなんですか」

#「うん……。懐なつかしいね、れなちゃんに、いっぱい好きって言ってもらったの。あれからまだ、半年も経ってないんだよね」

#「そ、それは」

#たぶん、真唯を赤あか坂さかのホテルに追いかけていったときのことだ。

#あの頃のわたしは、人の誘いを断るのが怖くて、本当に怖くて、紫陽花さんに誤解されないように、必死に訴えたんだった。

#って、黒歴史のやつじゃないですか……！

#「……あのね」

#紫陽花さんがおずおずと口を開く。

#夕日色のチークを差したように、頰が赤い。

#「実は、あのときからちょっと、れなちゃんのこと、意識してたんだよ」

#「そ、そうだったんですか……!?」

#「おかしいよね、女の子同士だったら、好きだとか、そんな言葉はよく言い合ったりするのに。でも、なんでかな。れなちゃんの好きって言葉には、本物の響きを感じたんだ」

#そこに大切な言葉がしまってあるみたいに、紫陽花さんは胸の中心に両手を当てる。

#「本当に、本当にこの子は、私のこと好きなんだ……って、そんな風に、わかっちゃったの。だからかな。私のほうが逆に、れなちゃんを意識するようになっちゃった」

#「は、恥ずかしいです」

#わたしにとっては忘れ去りたいぐらい恥ずかしい記憶だったのに……。そんな風に、思っていてくれたんだ……。

#確かにわたしは、紫陽花さんのことが大好きだったけど、恋人とかは、わかんなくて。

#でも、紫陽花さんにも言われた。わたしの大好きな友達の定義は、他の人から見たら、恋人の定義と一緒だって。

#だったら、みんなで幸せになれるなら……恋人でもいいんじゃないかな、って。わたしは、そう開き直ったんだ。

#好きな気持ちには変わりないんだし。それに、その……。恋人じゃなきゃしないようなことも、できるのは、ええと……。

#緊張するけど……でも、嫌じゃない、し……。

#「れなちゃん、顔まっかだよ」

#紫陽花さんがあんまりにもかわいらしく笑うから。

#照れ隠しで、消極的に反撃をする。

#「そ、それを言うなら、紫陽花さんだって」

#「え、えー？」

#ほっぺに手を当てた紫陽花さんが、ちょっと目を丸くして、それもすごくかわいかった。

#しばらくふたりで笑い合ってから、紫陽花さんがまるで甘えるように。

#「手、にぎっていい？」

#「うん」

#手を差し出すと、紫陽花さんが両手で包み込むように握ってくる。

#緊張のせいか、紫陽花さんの手は震えていた。

#「もう、恋人なんだもんね」

#「うん」

#わたしと同じ身長の紫陽花さんが、わたしの目を見つめる。

#向けられたその好意から、今度は目を逸そらさない。

#わたしもまた、紫陽花さんの手を両手で握り返す。

#「付き合っているんだよ、わたしたち」

#「うん――」

#夕日よりもきれいに目を細めて、紫陽花さんが笑う。

#「大好き、れなちゃん」

#紫陽花さんは、わたしとの距離を埋めるように、一歩を踏み出して。

#観覧車に乗ったときのように、少し顔を傾けた紫陽花さんが、ゆっくりと近づいてきて。

#観覧車に乗ったときとは違って……。わたしは目を閉じた。

#この先、もしわたしたちになにか大きな問題が起きても。

#それでもわたしはずっと、このひとを大切にしたいって、思うんだ。

#誰よりも尊とうとい女の子、わたしの恋人、紫陽花さんを。

#

#唇に柔らかな感触がして――。

#――わたしはパチッと目を開いた。

#

#「紫陽花さん！」

#「きゃっ」

#ぎゅ～～～っと、紫陽花さんの細い体を、抱きしめる。

#「わたしも、紫陽花さんのこと、好き！　大好き！　ずっと好きだから！」

#紫陽花さんの髪と香りに包まれながら告げるわたしに、紫陽花さんはずっと顔を真っ赤にしながら、目を線にして笑っていた。

#「あはは、れなちゃん、私も大好き！　れなちゃんのこと、好きっ！」

#今度は紫陽花さんがわたしを抱きしめてきて、それからしばらくわたしたちはお互いを抱きしめ続けていた。

#屋上から眺める夕日は、まるで宝石みたいに輝いていて。

#好きという気持ちで、今なら空も飛べるような気がしたんだ。……なんて、大げさかな？

#

#